

2. 啓発効果の評価に関する調査

ゲイ NGO の HIV 予防介入事業のプロセス、プログラム、アウトリーチ等の効果を評価する調査（クラブイベント参加者調査、バー顧客調査、MSM 人口調査、携帯電話による RDS 調査、エイズ拠点病院受療者対象の調査）を検討し、実施した。

大阪では 1998 年以来継続しているクラブイベント参加者対象の質問紙調査を実施し、MASH 大阪の啓発資材等の認知、予防行動、検査行動は 2006 年調査に比べて上昇しており、啓発普及が進んでいることが示された。今後は人口調査等と重ねた分析を検討し、大阪地域の MSM 集団における HIV 感染の程度、検査行動、予防行動の広がりやの程度などを人口学的に把握できるかを検討していきたいと考える。

福岡ではこれまでの商業施設との関係構築が実り、バー顧客 400 人余りの調査が可能となった。CBO・LAF の「コンドーム認知率」76.1%、「使ったことがある」42.0%とこれまでの商業施設へのアウトリーチ効果を示す状況になっていた。本来は、LAF の介入前にベースライン調査が必要であったが、調査はクライアントとの信頼関係の元に行われるものであり、今回のバー顧客調査の実現は意義あるものといえる。昨年の携帯電話による RDS 調査も LAF から生まれたアイデアで、福岡で最初に実施したものである。こうした NGO の積極性とコミュニティへのかかわりは、HIV 感染対策を進めていく上で重要であり、本研究班の成果を観察する上でも有用なものとする。

これまでに滞日外国人 MSM の HIV 感染については明らかにされていない。本年度は日本語・英語による質問紙調査の準備を進めた。

3. MSM を対象とする HIV 抗体検査について

名古屋地域の MSM 対象の HIV 抗体検査会では、受検者への質問紙調査により受検者の特性を把握し、検査への評価を行っている。また、大阪地域では大阪土曜日常設検査において同様に質問紙調査により MSM 受検者の動向を把握している。これらの調査により、名古屋では MSM を対象としたイベントと同時に開催した HIV 検査会と保健所において土曜日、日曜日に行った HIV 検査会とでは、受検者に相違が見られ、後者の HIV 検査会（M 検）は保健所での検査

も行きにくく、NLGR にも行きにくい層を取り込んでいることが示唆されていた。また、大阪土曜日常設 HIV 検査は、情報を MASH 大阪が SaL+ で広報しており、そのためもあって MSM の受検者は一定の割合で推移している。本年度の研究では MSM 受検者中の推定陽性割合が従来よりも低い（3%）こと、MSM 受検者の年齢がやや高いことなどが示されていた。こうした観察に基づいて、MSM が受ける HIV 抗体検査のあり方を検討し、より早期の検査、早期の受療への機会を適切に提供する HIV 検査体制が望まれると考える。

本年度は、沖縄においても MSM 対象の HIV 検査が実施され、受検者から検査の有り方に関する情報を集めている。そのアンケートによると、多数の受検者を参加させることができた要因として、MSM のみがアクセスするネット関連媒体（携帯サイト、ネット）に広報を行ったこと、当地の MSM 当事者団体（NANKR）が主体となって友人・知人や MSM 対象の商業施設に直接出向いてのコミュニケーションを図ったことが挙げられている。また MSM が受検しやすい検査会の環境面について、事前に行われた MSM のイベント時のアンケート調査を基本にして整備されたことを、NANKR の有する情報チャンネルで積極的に広報したことも重要な点であると報告している。

さらに沖縄の調査からは、MSM の受検率の向上には、STD の無料検査、日曜・祝祭日の開催なども重要な要因であることが指摘されている。最も望む検査環境（単一選択）としては、「検査結果の即日返し」が最下位で、STD 無料検査と MSM に特化した検査会の開催の 2 つが上位にあった。即日検査の導入は自治体・保健所での受検者数の増加となって示されているが、MSM の受検者にとっては、異性間よりも HIV 以外の STD 検査への関心、プライバシー保護への強い希望がより上位にあると思われる。また、沖縄の受検者からは「会場では MSM しか来ないので MSM であることを敢えて職員に伝えなくて済む、心理的負担が軽減される」との回答が見られている。HIV 検査は、検査を必要としている層に向けて、それらに届く方法で広報し、受検者の求める環境が多様であることを念頭において実施していくことが大切と思われる。

E. 自己評価

1) 達成度について

大阪、東京では CBO による介入計画を大きく変更したが、コミュニティベースの啓発普及はコミュニティセンターを軸に継続され、各地域とも初年度計画をほぼ進行した。沖縄では加藤研究班と計画を調整し、当研究班は自治体の MSM への理解促進と検査体制構築を軸とすることにした。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

CBO が実施する HIV 予防介入等の成果を評価する調査（クラブイベント参加者調査、バー顧客調査、MSM 人口調査、携帯電話による RDS 調査、拠点病院受療者対象調査）は、本邦では MSM 以外の個別施策層では見られない。

3) 今後の展望について

HIV/エイズ発生動向は MSM への HIV 感染対策が喫緊の状況であることを示している。東京、大阪、名古屋では検査情報や検査機会が増大しつつあるが、MSM 受検者の HIV 陽性割合は 3-5% と高い。また地方では HIV/AIDS 報告数に占めるエイズ患者の割合が高い。これらは MSM における HIV 感染者の増加傾向は今後も続き、全国的に対策が望まれる状況になることを示唆している。本研究では MSM の現状を最も的確に把握しゲイコミュニティに基盤をおく CBO が、研究者と協働して感染拡大への対応を担っている。当研究班の CBO とゲイコミュニティのネットワークによる啓発普及は益々重要となり、そのための研究事業の継続と MSM を対象にした総合的な対策の実施が望まれる。

F. 結論

1. 地域の男性同性間の HIV 感染予防介入研究

①啓発資材の開発、人材の育成などのマニュアル化のための資料収集（東京他）、②商業施設、インターネット業界などを介した介入の継続（各地域）、③新たなニーズや啓発効果を把握する調査の実施（大阪、福岡）、④各自治体の MSM 対象のエイズ施策との調整（各地域）、⑤献血で HIV 陽性率の上昇がみられている大阪での改善に向けた啓発の方向性の検討（大阪、など）を実施した。

2. 行動学的・社会的ネットワーク調査

1) 啓発のニーズおよび効果評価に関する調査

・大阪では 1998 年以來継続しているクラブイベント参加者対象の質問紙調査を実施した。「dista に行った」25.2%、「情報誌 SAL+ の購読」36.8% と啓発普及が進んでいることが示された。

・福岡では初めてバー顧客対象の精密質問紙調査を実施（回収数 412 件）した。CBO・LAF の「コンドーム認知率」76.1%、「使ったことがある」42.0% とこれまでの商業施設へのアウトリーチの啓発効果が示唆された。

2) 社会的、行動学的ネットワークに関する調査

携帯電話による RDS 調査はこれまで実施してきたものを分析し、各地域で継続調査を次年度に計画している。性的ネットワーク、地域間の移動に伴うネットワークに関するインターネット調査では滞日外国人 MSM も対象とすることとし、日・英の質問紙の開発を検討した。

3) HIV 検査行動、予防行動等の特性に関する調査

・大阪土曜日常設検査機関での質問紙調査を継続した。過去の調査において、MSM 受検者では 4-5% の陽性割合であったが、2007 年度は 3% と低下していた。

・名古屋の MSM を対象としたイベント NLGR2008 の無料 HIV 抗体検査会（6 月実施）と、M 検（12 月実施）の受検者について質問紙調査を行った。HIV 陽性率は NLGR での HIV 検査会が 1.8%、M 検が 5.4% と異なっており、M 検は保健所での検査も行きにくく、NLGR にも行きにくい層を取り込んでいることが示唆された。

・沖縄においても MSM 対象の HIV 検査が実施され、受検者から検査の有り方に関する情報を集められた。それによると、多数の受検者を参加させることができた要因として、MSM のみがアクセスするネット関連媒体（携帯サイト、ネット）に広報を行ったこと、当地の MSM 当事者団体（NANKR）が主体となって友人・知人や MSM 対象の商業施設に直接出向いてのコミュニケーションを図ったことが挙げられている。

G. 知的所有権の出願・取得状況 なし。

H. 研究発表

研究代表者

市川誠一

- 1) ○Seiichi Ichikawa, Yukio Cho, Mio Sato: The Activities and Role of the Gay Community Center 'akta' in HIV Prevention within the gay Community in Tokyo, Challenging Practices on HIV/AIDS in Japan, Japanese Foundation for AIDS Prevention, 2008 52-57.
- 2) ○市川誠一: 日本における MSM (Men who have Sex with Men)間の HIV/AIDS の流行とその対策—疫学の視点から— F-GENS Publication Series (お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム「ジェンダー研究のフロンティア」)、2008、33、9-18
- 3) ○市川誠一: 男性同性間の HIV 感染対策—生育過程におけるとり組みの必要性—、セクシュアリティ、2008、34 号、58-61
- 4) ○市川誠一: 日本の HIV/AIDS の動向とその対策の方向性、名古屋市立大学看護学部紀要、2008、8、1-7
- 5) ○大森佐知子、金子典代、鬼塚哲郎、辻宏幸、木村博和、市川誠一: Men who have Sex with Men における性交時の物質使用と性行動との関連、日本エイズ学会誌、査読中
- 6) ○新ヶ江章友、金子典代、内海眞、市川誠一: HIV 抗体検査会に参加した東海地域在住 MSM (Men who have Sex with Men) の性自認と HIV 感染リスク行動、日本エイズ学会誌、投稿予定
- 7) ○金子典代、市川誠一、辻宏幸、鬼塚哲郎: 健康教育ツールを開発しよう、計画③対象者にひびくメッセージをつくろう、保健師ジャーナル、2008、64 巻 1 号、82-89
- 8) ○金子典代、市川誠一、辻宏幸、後藤大輔、塩野徳史、鬼塚哲郎: 健康教育ツールを開発しよう、計画②ツールを使えるものにするための最後の押さえどころ—MASH 大阪による健康教育資材の紹介、保健師ジャーナル、2007、63 巻 12 号、1142-1149
- 9) ○市川誠一、内海 眞、鬼塚哲郎、木村博和、佐藤 功、佐藤未光、長谷川博史、日高庸晴、山本政弘: 男性同性間の HIV 感染対策に関するガイドライン—地方自治体における男性同性間の HIV 感

染対策への対応とコミュニティセンターの役割と機能—、(2006 年度改訂版)、2007、

- 10) ○Seiichi Ichikawa, et al: Guidelines for HIV/AIDS Prevention and Support for Men Who Have Sex with Men (MSM)/ For Local Government Initiatives (FY 2005 edition), Specific Disease Control Division, Health Service Bureau, Ministry of Health Labour and Welfare, Japan, 2007, 3, 1-36.
- 11) ○金子典代、内海眞、市川誠一、東海地域のゲイ・バイセクシュアル男性の HIV 抗体検査の受検動機と感染予防行動、日本看護研究学会雑誌、2007、30 巻 4 号、37-43
- 12) ○市川誠一、張由紀夫、佐藤未光: MSM コミュニティにおけるコミュニティセンター—akta の役割と活動、保健医療科学、2007、56 巻 3 号、230-234
- 13) ○市川誠一: わが国の男性同性間の HIV 感染対策について—ゲイ NGO の活動を中心に—、日本エイズ学会誌、2007、9 巻 1 号、23-29

(学会発表)

- 1) ○日高庸晴、金子典代、福山由美: 日本のエイズ—ゲイ男性ののぞむ HIV 検査環境、日本看護研究学会、2008 年 8 月 21 日、神戸
- 2) ○市川誠一、金子典代、山田創平、コーナ・ジェーン、大森佐知子、木村博和、鬼塚哲郎、辻宏幸、後藤大輔、町登志雄: 大阪地域の中高年 MSM における MASH 大阪の介入認知および予防行動に関する研究、日本エイズ学会学術集会・総会、2008 年 11 月 27 日、大阪
- 3) ○新ヶ江章友、金子典代、内海眞、市川誠一: NLGR (Nagoya Lesbian & Gay Revolution) 2008 での HIV 抗体検査会に参加した東海地域在住 MSM の性自認と性行動、日本エイズ学会学術集会・総会、2008 年 11 月 27 日、大阪: 大阪交流センター
- 4) ○山田創平、鬼塚哲郎、塩野徳史、内田優、町登志雄、鍵田いづみ、辻宏幸、後藤大輔、市川誠一: 大阪地域 MSM の人口流動に関する研究—MSM 向け商業施設集積エリアでの人口推定調査とアンケート調査を基に—、日本エイズ学会学術集会・総会、2008 年 11 月 27 日、大阪
- 5) 今井光信、市川誠一、他: HIV 検査相談—その充実と今後の方向を考える—、日本エイズ学会学術

集会・総会、2008年11月26日、大阪

- 6) ○鬼塚哲郎、他：エイズNPOの社会的役割とは何か？—関西における20年の歩みと今後の展望—、日本エイズ学会学術集会・総会、2008年11月28日、大阪
- 7) ○鬼塚哲郎、山田創平他：MSMに向けたHIV感染対策における行政・専門職者・コミュニティの連携の重要性、日本エイズ学会学術集会・総会、2008年11月28日、大阪
- 8) ○金子典代、福山由美、市川誠一：HIV感染の拡大はどこでおきているのか？—看護職者に求められる役割を考える—、日本看護科学学会、2008年12月14日、福岡
- 9) ○Akitomo SHINGAE, Noriyo KANEKO, Makoto Utsumi, and Seiichi ICHIKAWA: Discordance between sexual behavior and self-reported sexual identity among MSM (Men who have Sex with Men) participating in the NLGR (Nagoya Lesbian & Gay Revolution) HIV testing events: Implications for developing future community-based prevention interventions, 4th German-Japanese HIV Symposium, March 23-24, 2009, Bochum, Germany: St. Josef Hospital

研究分担者

伊藤俊広

- 1) Seiichiro Fujisaki, Saeko Fujisaki, Shiro Ibe, Tsukasa Asagi, Toshihiro Itoh, Shigeru Yoshida, Takao Koike, Masayasu Oie, Makiko Kondo, Kenji Sadamasu, Mami Nagashima, Hiroyuki Gatanaga, Masakazu Matsuda, Mikio Ueda, Aki Masakane, Mami Hata, Yasushi Mizogami, Haruyo Mori, Rumi Minami, Kiyomi Okada, Kanako Watanabe, Takuma Shirasaka, Shinichi Oka, Wataru Sugiura and Tsuguhiro Kaneda: Performance and quality assurance of genotypic drug resistance testing for human immunodeficiency virus type 1 in Japan, Jpn. J. Infect. Dis, 2007, 60, 113-117
- 2) 日本におけるHIV-1遺伝子型薬剤耐性検査のコントロールサーベイ：藤崎誠一郎、藤崎彩恵子、

伊部史郎、浅黄 司、伊藤俊広、吉田 繁、小池隆夫、大家正泰、渡邊香奈子、正兼亜季、上田幹夫、湯永博之、松田昌和、貞升健志、長島真美、岡田清美、近藤真規子、秦 真美、溝上泰司、森治代、南 留美、白阪琢磨、岡 慎一、杉浦 瓦、金田次弘：日本エイズ学会誌、2007、9、136-146

佐藤未光

- 1) ○Seiichi Ichikawa, Yukio Cho, Mio Sato: The Activities and Role of the Gay Community Center 'akta' in HIV Prevention within the gay Community in Tokyo, Challenging Practices on HIV/AIDS in Japan, Japanese Foundation for AIDS Prevention, 2008 52-57,
- 2) ○市川誠一、張由紀夫、佐藤未光：MSMコミュニティにおけるコミュニティセンターaktaの役割と活動、保健医療科学、2007、56巻3号、230-234
- 3) ○Seiichi Ichikawa, Mio Sato, Yukio Cho, Junko Araki, Tetsuro Onitsuka, Hiroyuki Tsuji, Sohei Yamada, Makoto Utsumi, Masahiro Yamamoto, Sato Isao: The role and activities of gay community centers spaces in Tokyo, Osaka, Nagoya, and Fukuoka in Japan, 8th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific August, 2007, Sri Lanka (国際会議)

内海 眞

- 1) ○金子典代、内海眞、市川誠一、東海地域のゲイ・バイセクシュアル男性のHIV抗体検査の受検動機と感染予防行動、日本看護研究学会雑誌、2007、30巻4号、37-43
- 2) ○菊池恵美子、内海眞、浜口元洋：名古屋医療センターにおけるMSM外国籍患者動向、日本エイズ学会学術集会・総会、2008年12月、大阪
- 3) ○Seiichi Ichikawa, Mio Sato, Yukio Cho, Junko Araki, Tetsuro Onitsuka, Hiroyuki Tsuji, Sohei Yamada, Makoto Utsumi, Masahiro Yamamoto, Sato Isao: The role and activities of gay community centers spaces in Tokyo, Osaka, Nagoya, and Fukuoka in Japan, 8th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific August, 2007, Sri Lanka (国際会議)

鬼塚哲郎

- 1) ○鬼塚哲郎、山田創平：感染に脆弱な集団にどう予防介入するか～マイノリティ集団における一次予防、二次予防、三次予防のあり方を検証する、治療学、2008、42巻5号
- 2) ○金子典代、市川誠一、辻宏幸、鬼塚哲郎：健康教育ツールを開発しよう、計画③対象者にひびくメッセージをつくろう、保健師ジャーナル、2008、64巻1号、82-89
- 3) ○市川誠一、張由紀夫、佐藤未光：MSMコミュニティにおけるコミュニティセンターaktaの役割と活動、保健医療科学、2007、56巻3号、230-234
- 4) ○金子典代、市川誠一、辻宏幸、後藤大輔、塩野徳史、鬼塚哲郎：健康教育ツールを開発しよう、計画②ツールを使えるものにするための最後の押さえどころ-MASH大阪による健康教育資材の紹介、保健師ジャーナル、2007、63巻12号、1142-1149

山本政弘

- 1) Minami R, Takahama S, Ando H, Miyamura T, Suematsu E, and Yamamoto M: Human herpesvirus 8 DNA load in the leukocytes correlates with thrombocytopenia in HIV-1 infected individuals. AIDS Res Hum Retroviruses. (in press) (和文)
- 2) 吉川博政、田上正、山口泰、玉城廣保、樋口勝規、山本政弘：HIV感染者における歯科医療連携に関する研究。日本エイズ学会誌 10(1)：41-49, 2008.
- 3) ○Noriyo Kaneko, Masahiro Yamamoto, Kyung-Hee Choi, Yasuharu Hidaka, Seiichi Ichikawa: Cell phone survey using RDS to investigate MSM's social networks and HIV risk behaviors in Japan, 8th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific August, 2007, Sri Lanka (国際会議)

- 4) ○Seiichi Ichikawa, Mio Sato, Yukio Cho, Junko Araki, Tetsuro Onitsuka, Hiroyuki Tsuji, Sohei Yamada, Makoto Utsumi, Masahiro Yamamoto, Sato Isao: The role and activities of gay community centers spaces in Tokyo, Osaka, Nagoya, and Fukuoka in Japan, 8th International Congress on AIDS in Asia and the Pacific August, 2007, Sri Lanka (国際会議)

健山正男

- 1) Hideta Nakamura, Masao Tateyama, Daisuke Tasato, Syusaku Haranaga, Satomi Yara, Futoshi Higa, Yuji Ohtsuki, Jiro Fujita: Clinical utility of serum β -D-glucan and KL-6 levels in Pneumocystis jirovecii pneumonia. Internal Medicine. 2009. 48
- 2) Hibiya K, Higa F, Tateyama M, Fujita J: The pathogenesis and the development mechanism of Mycobacterium avium complex infection. Kekkaku. 2007;82(12):903-18. Review.
- 3) Hibiya K, Furugen M, Higa F, Tateyama M, Fujita J. Are pigs a suitable model for disseminated Mycobacterium avium complex infections in AIDS patients? AIDS Research and Therapy. under review.
- 4) ○健山正男：急増する沖縄県のHIV/AIDS患者の現状、沖縄県医師会雑誌、2007、43巻12号、19-21
- 5) Gatanaga H, Ibe S, Matsuda M, Yoshida S, Asagi T, Kondo M, Sadamasu K, Tsukada H, Masakane A, Mori H, Takata N, Minami R, Tateyama M, Koide T, Itoh T, Imai M, Nagashima M, Gejyo F, Ueda M, Hamaguchi M, Kojima Y, Shirasaka T, Kimura A, Yamamoto M, Fujita J, Oka S, Sugiura W: Drug-resistant HIV-1 prevalence in patients newly diagnosed with HIV/AIDS in Japan, Antiviral Research, 2007, 75, 75-82

Ⅱ. 分担研究報告(地域別)

東北地域における男性同性間の HIV 感染予防介入研究

研究分担者：伊藤俊広（国立病院機構 仙台医療センター）

研究協力者：太田貴、小浜耕治、庄子一昭、内海章友（東北 HIV コミュニケーションズ&やろっこ）、佐藤功、西巻雄司、佐藤愛子、鈴木智子、疋田美鈴、武藤愛（国立病院機構 仙台医療センター）

研究要旨

平成 19 年度まで行なわれた「男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究」にひきつづき研究活動を継続した。

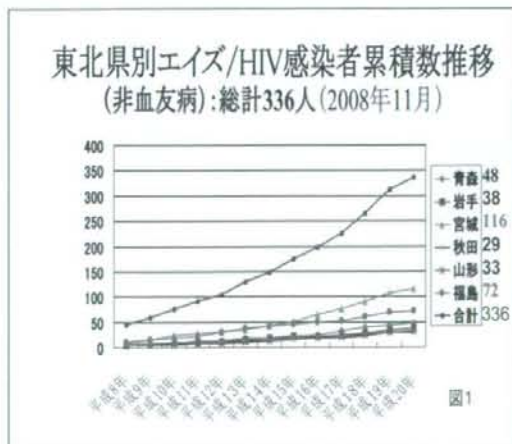
ゲイコミュニティ向け啓発チーム「やろっこ」の活動におけるアンケート調査の結果、HIV 抗体検査受検率やコンドーム装着率の増加がみられ、活動の結果としての行動変容が生じている可能性が示唆された。

医療現場においては HIV 診療の 2 局化（限られた医療機関への患者の集中）が問題となっており、種々の研修会・講演会でも診療要請を訴える場面が多かった。さらに HIV の診断が医療機関でなされることが多いことから、STI や免疫障害に伴う疾患だけでなく、何らかの疾病で受診した際にも HIV 検査を勧めるよう取り組みを勧めた。

今後東北でのゲイコミュニティとの接触を拡大していく上で、研究活動員の人的強化とともに、行政・教育・医療（仙台医療センター他）などの領域との連携が重要である。

A. 研究目的

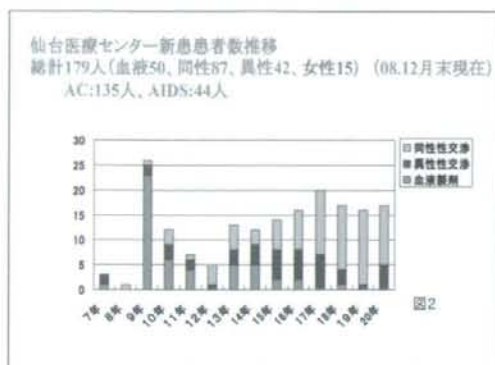
動態調査によると、東北地方における HIV 感染者・AIDS 患者の累積数は平成 20 年 11 月末現在、336 名と報告され、平成 19 年同時期と比べ 33 名の増加となった（図 1）。



仙台医療センターの受診者の内訳をみると、近年は男性同性間での性的接触による感染がほとんどで、東北地方においても男性同性間の HIV 感染対策の必要性は明らかである（図 2）。

東北地方のゲイコミュニティは、小規模なコミュニティが各県に散在しているため、全体像が把握しづらい。また、年々増加傾向にあるとはいえ、感染者・患者の報告数は他の地域に比べると少なく、HIV に対する社会的関心も低い。

こうした状況の中で、効果的な HIV 感染対策を推進するために、行政、医療、福祉、NPO、コミュニティ等と協働して取り組み、課題解決を図ることを目的として研究を行なった。



B. 研究方法

「仙台医療センター」、平成5年よりHIVに関わる活動をしているNPO「東北HIVコミュニケーションズ(THC)」、ゲイコミュニティ向けのHIV啓発チーム「やろっこ」の三者を中心として、東北地方における男性同性間のHIV感染対策について下記に示すごとく平成17年～19年に行われた「男性同性間のHIV感染対策とその評価に関する研究」に引き続き調査・研究を行なった。

1. 医療者への積極的なHIV検査のすすめ
2. 仙台医療センターのHIV性感染者における重複STIの解析
3. ゲイコミュニティへの啓発活動

HIVを語る場および情報の提供(やろっこ交流会)、啓発資材の作成・配布、HIV陽性者を身近に感じるためのイベントの開催、ゲイコミュニティとの連携による調査。

4. 行政との連携

C. 研究結果

1. 医療者への積極的なHIV検査のすすめ

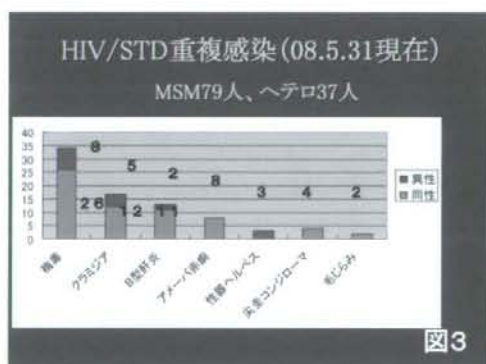
以下に記す種々の研修会・会議を通して、医療従事者に対して、積極的なHIV検査の必要性について情報提供するとともに、行政とも連携し抗体迅速検査を実践した。

1) 東北HIV看護研修(H20.1.29、7.8、H21.3.3 予定:仙台)、2) 東北エイズ菌科診療協議会(H21.1.24:仙台)、3) 東北ブロッ

ク・エイズ拠点病院等連絡会議(H20.1.10、H21.1.6:仙台、H20.7.1:山形)、4) 地域医療研修センター講演会(H20.11.19:仙台)、5) 東北エイズ/HIV拠点病院等薬剤師連絡会議(H20.12.6:仙台)、6) 東北エイズ・HIV拠点病院等心理・福祉職連絡会議(H20.12.6:仙台)、7) 東北エイズ臨床カンファレンス(H20.2.2、H21.2.14:仙台)、8) 東北HIVネットワーク会議(H20.2.2、H21.3.28 予定:仙台)。

2. 仙台医療センターのHIV性感染者における重複STIの解析

重複STIの解析では図3に示しているが、MSMにおいて以前同様STI重複感染率が高く、ことに梅毒が際立って高い。クラミジア、B型肝炎と続いている。



3. ゲイコミュニティへの啓発活動

HIVを語る場および情報の提供を目的とした「やろっこ交流会」を2月までに8回実施、のべ99名の参加があった。交流会はHIVやHIV啓発に関連したテーマを設けて話をする会と、セックスに直接結びつくハッテン場であるゲイビーチ(海岸)での清掃活動を通してHIVについて考える「LOVE BEACH PROJECT」の2つのパターンで実施した。「LOVE BEACH PROJECT」の中では、ゲイビーチの利用者への啓発資材の配布も行なった。

また、HIV検査の受検を促進するポストカ

ードを1種(2000部)、コンドームの使用を呼びかけるポストカードを2種(各2000部)作成し、コンドームとあわせて東北地区のゲイ向け商業施設(30施設)を中心に配布を始めた。

HIV陽性者を身近に感じるためのイベントとして開催した「ぼくらの課外授業-Living Together in SENDAI-」には、71名の来場者があり、ボランティアスタッフも含めると約100名に対し、HIVに関するメッセージを届けることができた。

ゲイコミュニティとの連携による調査として、バレーボール大会においてアンケート調査を行った。約150人の参加者へアンケートを配布し、有効回答数で55件の回答を得た。

アンケート回答者の属性は、東北在住の者が83.6%と大多数を占めた。HIV検査の過去1年間の受検率は、23.6%と前年の13%から大きく増加した(図4,5)。

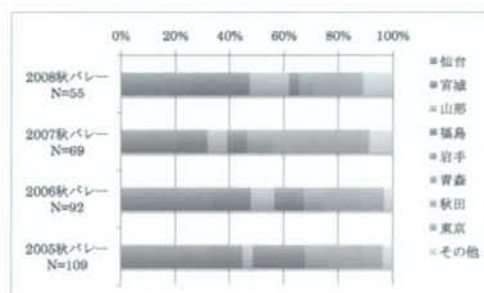


図4

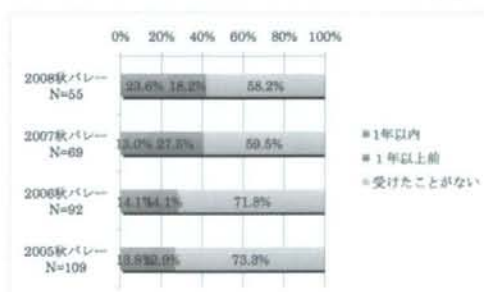


図5

その一方で、アナルセックスでのコンドームの常用率(アナルセックスをしたと回答した者のうち、必ず使用したと回答した者の割

合)は、特定相手の場合、および不特定相手て挿入される場合は前年に比べわずかに増加したものの、不特定相手に挿入をする場合は、47.6%と前年の55.2%から悪化した(図6、7)。

アナルセックスをしている者の割合

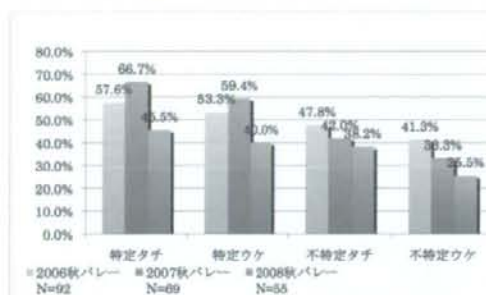


図6

コンドーム常用率

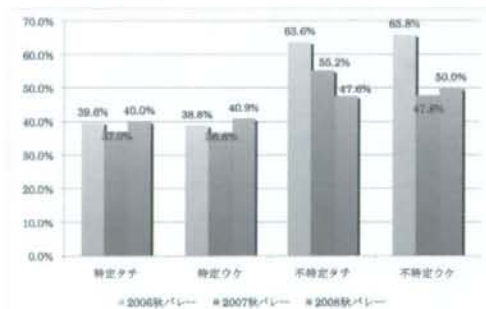


図7

4. 行政等との連携

1) HIV迅速検査会(仙台市主催)(H20.6.7,12.7:仙台)、2)仙台医療センター健康まつり(H20.11.15:仙台)。分担研究者・研究協力者がカウンセリングに協力するなど援助を行った。3)仙台市エイズ・性感染症対策推進協議会への参画:仙台市のHIV施策策定のための協議会に参画した。

D. 考察

東北においては、他地域同様 HIV 感染者は増加傾向にあるが、いまのところ緩やかな増加にとどまっており、医療現場での認識は低いと言わざるを得ない。結果として HIV 診療の 2 局化が生じている。この状況を改善させていくために種々の研修会・活動・研究が近年開始（医療体制班中核拠点病院構想）されたところであり、是正については今後の課題である。

やろっこ交流会の一環で行った「LOVE BEACH PROJECT」の清掃活動で回収したゴミの中に、やろっこが配布しているコンドームのパッケージがあり、配布した啓発資材が実際に利用されていることが確認できた。わずかずつではあるが、ゲイコミュニティへ向けた活動が浸透しつつあると考えられる。

また、アンケート調査の結果を見ると、HIV 検査の過去 1 年間の受検率が大きく増加した。

アンケートの回収数は減り、母数が少なくなっているが、ゲイコミュニティを対象にしたクラブイベント開催時に行った web アンケートでも、過去 1 年間の HIV 検査の受検率が 23.5% とほぼ同率であった。こちらのアンケートには 293 件の回答があったことを考えると、ターゲットとしているコミュニティの現在の受検率を反映する指標として採用できると考えられる。

一方で、コンドームの常用率に関しては、回収したアンケートの中から、さらに「アナルセックスをした」と回答している者に絞られることから母数が大きく減るため、アンケート結果が必ずしも指標となるとは限らないが、コンドームの使用に関して改善の兆しが見られないことから、今後は重点的にコンドームの使用を訴えていく必要がある。

次年度以降、アンケートの回収数を増やす工夫が必要であるが、そのためには研究を施行する東北における NGO の活動を強化し、未だ脆弱な地方のゲイコミュニティともスムー

ズに連携がとれるように研究をすすめていく必要がある。

ゲイコミュニティとのスムーズな連携をすすめるためには、コミュニティへ向けたフィードバックが必要であり、キーパーソンへ向けた研究成果報告会等を行っていく必要がある。

E. 結語

東北（仙台）のゲイコミュニティへ向けた啓発の体制作りが少しずつだが整備されつつあるが、今年度は人的パワーの不足を意識せざるを得なかった。アンケートの収集状況の改善、そして現在のゲイコミュニティだけでなく、この外側にあるコミュニティや仙台以外の地域に活動を広げていく上でも、人員の確保はかせない。今後も協力可能な NGO と連携を強める必要がある。

HIV 抗体検査受検率やコンドーム装着率の増加がみられ、活動の成果が主に意識面で現れ始め、行動変容が生じている可能性が示唆された。ゲイコミュニティの理解を得つつ、より効果的なプログラムを開発、安定して提供し、コミュニティ構成員の行動変容が可能になるようにしてゆく必要がある。そのためには、戦略的に行政等の機関に提言を行い、より広い連携体制を構築してゆくことが求められる。

F. 発表論文等

- 1) 伊藤俊広：東北地方における同性間の HIV/STI 感染予防啓発の普及促進に関する研究、男性同性間の HIV 感染対策とその評価に関する研究（平成 17 年度～19 年度 総合研究報告書）、厚生労働省科学研究費補助金エイズ対策研究事業、33-41, 2008
- 2) 伊藤俊広：NeuroAIDS の発症病態と治療法の開発を目指した長期フォローアップ体制の構築研究：AIDS 合併クリプトコッカ

ス髄膜炎の発症病態及び治療法の開発に関する研究、平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業、平成 19 年度総括、分担研究報告（主任研究者：中川正法）16-18, 2008, 3 月

- 3) 伊藤俊広：薬剤耐性 HIV の動向把握のための調査体制確立及びその対策に関する研究：東北ブロックにおける薬剤耐性 HIV の調査研究、平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業、平成 19 年度総括・分担研究報告書（主任研究者：杉浦 互）40-42, 2008, 3 月
- 4) 伊藤俊広：HIV 感染症の医療体制の整備に関する研究：東北ブロックの HIV 医療体制整備、平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業、平成 19 年度総括・分担研究報告書（主任研究者：岡慎一）26-29, 2008, 3 月

学会発表

- 1) 杉浦互、湯永博之、吉田 繁、千葉仁志、小池隆夫、伊藤俊広、原 孝、佐藤武幸、石ヶ坪良明、上田敦久、近藤真規子、今井光信、貞升健志、長島真美、福武勝幸、山元泰之、田中理恵、加藤信吾、宮崎菜穂子、藤井 毅、岩本愛吉、藤野真之、仲宗根正、巽 正志、椎野禎一郎、岡慎一、林田庸総、服部純子、伊部史朗、藤崎誠一郎、金田次弘、浜口元洋、上田幹夫、大家正義、田邊嘉也、渡辺香奈子、渡邊 大、白阪琢磨、桑原 健、森 治代、小島洋子、高田 昇、木村昭郎、南 留美、山本政弘、松下修三、健山正男、藤田次郎：2003-2007 年の新規 HIV-1 感染者における薬剤耐性頻度の動向、日本エイズ学会、2008 年、大阪
- 2) 伊藤俊広、佐藤 功、突田健一、成川孝一、鈴木靖士：HIV 感染症におけるクリプトコッカス髄膜炎再燃例に対するイトラコナゾールの使用経験、日本エイズ学会、2008

年、大阪

- 3) 正田美鈴、武藤 愛、佐藤 功、伊藤俊広、西巻雄司、鈴木智子、佐藤愛子、小倉美緒：宮城県における HIV 感染者の在宅医療等に向けての基本調査、日本エイズ学会、2008 年、大阪
- 4) 小住好子、佐藤ともみ、佐藤麻希、後藤達也、諏江 裕、伊藤俊広、佐藤 功：当院における抗 HIV 療法（ART）の薬剤選択の変遷、日本医療薬学会年会、2008 年、札幌

東京地域における男性同性間の HIV 感染予防介入研究

研究分担者：佐藤未光（ひかりクリニック、Rainbow Ring）

研究協力者：荒木順子、江島啓介、木南拓也、河辺宗知、柴田恵、張由紀夫（Rainbow Ring）、木村博和（横浜市南福祉保健センター）

研究要旨

当研究は、東京地域における男性同性間の HIV/STI 感染予防啓発を推進するために、今までに構築された体制を活用しながら、効果的な啓発モデルを提示することを目的とする。主に新宿 2 丁目の地域型コミュニティを対象とした研究であるが、戦略研究とも協力しながら、首都圏の他地域にも応用していくものである。東京のゲイコミュニティの規模と多様性を考慮しつつ、コミュニティに根ざした予防啓発を推進するために、当事者参加による CBO（Rainbow Ring）による予防啓発活動の展開を図り、その効果を検討する。

- 1) 予防啓発活動の拠点として、コミュニティセンター「akta」の運営を継続した。コミュニティに見える活動を展開すべく様々なイベントや展示会、講演会などへの活用を継続し、また予防啓発活動を推進する場の役割、および情報を求めて来場をする人への情報提供の場としての役割を遂行した。情報誌であるマンスリーakta もその一端を担ってきた。
- 2) 商業施設への継続的なアウトリーチ活動「デリヘルプロジェクト」「アダルトデリヘル」を通して、様々な啓発資材の提供をおこなうと同時に、各店舗とのネットワークが構築されてきた。デリヘルインタビューを通じて、コミュニティが好意的に受け入れるように工夫をしたアウトリーチ活動は、HIV 予防啓発活動をコミュニティ内に可視化させ、コミュニティの規範を変化させる効果があることがわかった。また、各店舗が抱えるコミュニティへの波及効果を利用できる可能性を得ることができた。
- 3) HIV/AIDS についての過去から現在までの経験や動きを振り返ることで、今の問題点や今後の課題を探ることを目的とした講演会「エイズはじめて物語」を開催した。
- 4) 東京都や新宿区などと連携して、検査機関や検査イベントのためのパンフレットの作製や配布、啓発資材の提供などを継続しておこなった。
- 5) NPO 法人「ぶれいす東京」との協働で、陽性者との共生を視点に入れた予防啓発を推進する Living Together 計画の一環である、「Living Together Lounge」「Living Together のど自慢」を継続して開催した。
- 6) Rainbow Ring の活動内容を紹介するホームページを改変中である。また、活動報告会を毎年おこなうことで、コミュニティに活動の成果を還元する場を設けた。

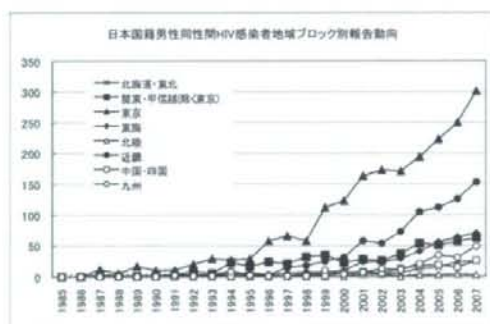
Rainbow Ring が新宿 2 丁目を中心としたゲイコミュニティに築いてきた体制は、一定の効果を生んできたと考えられる。当研究で得られた知見や手法は戦略研究においても有用であり、首都圏全体へのアプローチに活用することができる。Rainbow Ring や akta は、その立場やこれまでの経験から「インターフェイス」としての役割を担うことで、効果的なアプローチができると考えられる。akta はその他にも、コミュニティセンターとしての役割や、情報提供の場としての役割

など、多くの機能を担っており、それらを整理して評価していくことが重要である。

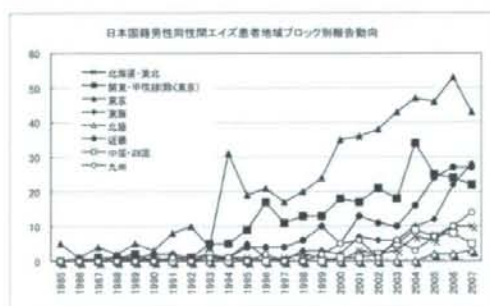
A. 研究の背景と目的

厚生労働省エイズ発生动向における性的接触による HIV 感染者・AIDS 患者報告数はいまだ増加が続いており、男性同性間の性的接触による感染は 6 割以上に達している。地域ブロック別では、東京における感染が他ブロックを大きく上回り、特に新規 HIV 感染者の増加は著しい（グラフ 1、2）。また、市川ら、内海らによると、東京、大阪、名古屋地域で MSM (Men who have sex with men) の HIV 受検者における陽性率は 2~3% であり、梅毒抗体陽性率も一般に比べ高いことから、HIV を含む性感染症 (STI) に対する有効な予防対策が必要であることを示唆している。

(グラフ 1)



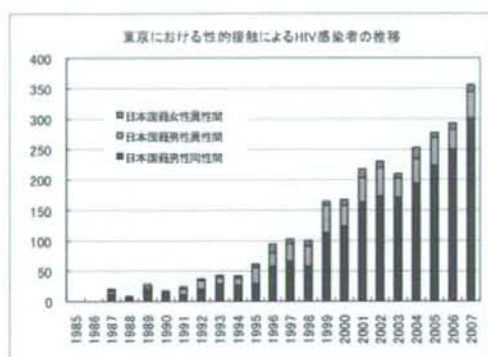
(グラフ 2)



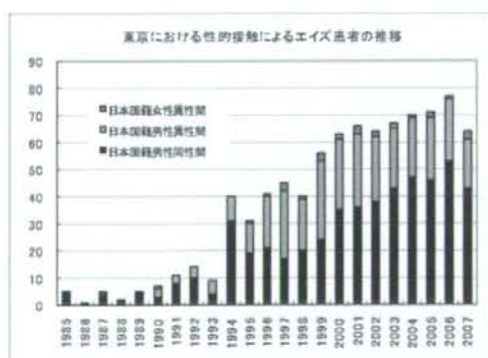
HIV/AIDS および他の STI が MSM の間で増加し続けている背景として、1) 今までの一般国民向けエイズ対策は MSM に訴求効果を示していない、2) これまでの MSM 向けの啓発資料開発や啓発普及が十分でない、3) 保健所等の

無料 HIV 抗体検査・相談等の普及および受検者への性感染症予防介入が十分でないことなどがあげられる。日本国籍男性の同性間性的接触による HIV/AIDS 報告数が 7 割以上を占める東京（グラフ 3、4）およびその近県地域においては、MSM を対象とした HIV/STI 感染予防対策を推進するためには、訴求性のある啓発資料および実効的な普及方法の開発が急務である。

(グラフ 3)



(グラフ 4)



東京におけるゲイコミュニティとしては、新宿 2 丁目を中心とした商業施設（約 300 軒のゲイバー、ゲイショップ、クラブ、ハッテン場など）が集積している地域（以下新宿 2 丁目）が、日本最大規模の地域型コミュニティとして存在している。新宿 2 丁目はゲイ・バイセクシュアル男性が集まり交流する場と

しての歴史が古く、現在でも一日に数千人のゲイ・バイセクシュアル男性が出入りをしており、週末にはクラブイベントなども開催され、全国からアクセスがある。ただし近年では、新宿2丁目以外にも商業施設が存在するようになり、主に上野・浅草地域、新橋地域、渋谷地域に集積している傾向にある。また、都内には約85軒のハッテン場が存在しているが、それらは点在している。メディアとしては主なゲイ雑誌社が都内に存在しており、それらに対する効果的なアプローチは東京のみならず全国に波及する可能性がある。しかし一方でインターネットの普及により、地域型コミュニティやハッテン場やゲイ雑誌にアクセスせずにゲイ活動をする人も増加してきている。ひとそれぞれに活動の内容や関わり方、関わり方の濃密さなどにおいて多様性があり、そしてゲイコミュニティの多様性は拡大しつつある。

HIV/AIDSやSTIに対する認識(知識や情報、予防行動、受検行動)は、以前から我々が行ってきた調査によると、一般の国民と比較すると高い傾向にあるものの、認識の低い層も高率に存在していた。特に若年層と高年層は認識が低い傾向にある。一方で性的活動が活発な20代~30代の感染が多い状況も続いている。

以上に示したような東京のコミュニティの多様性や、HIV/AIDSやSTIに対する認識の多様性を考慮しながら、効果的な予防啓発を推進するためのプログラムを実施する必要がある。

2002-2004年度(男性同性間のHIV感染予防対策とその推進に関する研究)では、主に新宿2丁目を中心とする地域型ゲイコミュニティにアクセスするMSMを対象として、予防啓発をコミュニティベースで取り組むために、当事者参加によるプロジェクト「Rainbow Ring」を結成した。予防啓発活動の拠点としてコミュニティセンター「akta」を設立し、

ハッテン場・バー・クラブイベントなどの商業施設へのアプローチを開始した。資材を作る上では、デザイナーや写真家・モデルなどのコミュニティ内のキーパーソンの協力を求めた。また、行政・医療機関の情報をコミュニティに普及するために協力関係を構築した。プロジェクトを進めるにあたっては、他のNPOとの協働のあり方も模索した。予防啓発のための基本的な体制づくりが着手され、その体制をベースとしたプログラムが施行された。

2005-2007年度(男性同性間のHIV感染予防対策とその評価に関する研究)は、予防啓発体制を拡大・強化しつつ、それらを効果的に活用して、ゲイコミュニティに訴求性の高い啓発方法や啓発資材を開発した。特に継続的にアウトリーチを続けることや、啓発キャンペーンを大きく打ち出すことによって、予防啓発活動が可視化されるようになり、各商業施設との間にはネットワークが形成されてきた。また、HIVに対するリアリティや認識が低い層を意識して、「HIV陽性者との共生」を念頭に置いたプロジェクト「Living Together計画」を、ふれいす東京と協働で展開した。

2006年より始まった「エイズ予防のための戦略研究(首都圏MSMグループ)」(以下「戦略研究」)では、対象を首都圏在住のMSMとして、新宿2丁目以外の地域型コミュニティへのアプローチを徐々に試みている。また、音楽やスポーツなどのサークル活動へのアプローチや、WEBサイトを充実させるなど、より多様なMSMへのアプローチを試みている。HIVに関わる周辺問題(若者のセクシュアリティの受容や、薬物やセックス等の依存症など)も視野に入れた啓発資材を開発し、MSMに対して支援的な検査環境の整備も進めている。

当研究(2008-2010年度)では、主に新宿2丁目を中心とした地域型コミュニティへの予防啓発を継続しつつ、今まで構築された体制

を活用することによって、戦略研究とも協力しながら、効果的な啓発モデルを提示することを目的とする。

B. 研究方法

1. 研究体制

本研究をおこなうにあたり、地域ボランティア団体 (CBO) として「Rainbow Ring」を結成し、研究協力体制の構築を図っている。Rainbow Ring は啓発資材開発およびその普及を行うが、スタッフ各自がもともと有しているネットワークを活用しつつ、既存のゲイ NGO、ゲイメディア、ゲイビジネス等の関係者から協力を得ながら、予防啓発のためのネットワークを構築している。

Rainbow Ring は予防啓発活動の拠点として、新宿 2 丁目内にコミュニティセンター「akta」を設立し、運営している。「akta」は (財) エイズ予防財団の委託事業として設立された。

また、本研究で試行する啓発資材、普及方法の有効性についての評価は研究者が担当し、さらに地域での MSM を対象とするエイズ施策の継続性のために東京および近県の行政との連携を図っている。

東京では、エイズが問題となった当初からゲイ NGO が様々な活動を展開してきている。本研究は、今なお増加が続いている MSM における HIV 感染に対して、新たにその予防啓発の促進を目標として実施するものである。これまでの既存のゲイ NGO の成果を損ねることなく、Rainbow Ring を通じてこれらの NGO と協力連携しつつ予防対策のあり方を検討する。

2. 予防啓発計画

2008 年度は以下のプログラムを実施する。

1) コミュニティセンター「akta」および、「マンスリーakta」

予防啓発活動の拠点の運営と活動を継続・促進する。また、拠点の広報と情報提供媒体となる月刊紙を継続して作製・配布する。コ

ミュニティ紙としての役割に加えて、予防啓発の情報を充実させる。

2) デリヘルおよび、アダルトデリヘル

新宿 2 丁目の商業施設へのコンドームや啓発資材のアウトリーチおよび、都内ハッテン場・ゲイボルノショップへの啓発資材のアウトリーチを継続する。また、昨年度おこなったデリヘルインタビュー調査の分析を行い、アウトリーチ活動の効果とニーズについて検討する。

3) 講演会

HIV 感染についての、基本的な情報を提供する講演会を開催する。

4) Living Together 計画

ぶれいす東京と協働して、陽性者がすでに身の回りで生活しているというリアリティを普及させるためのイベントを継続して開催する。

5) 医療・検査・行政との連携と情報提供

医療・行政との連携を継続し、検査等のサービスを周知させる。

6) ホームページ

Rainbow Ring のホームページを再構築し、インターネット上での啓発および、活動の紹介を展開する。

7) 研究成果発表会 (活動報告会)

Rainbow Ring およびコミュニティセンター「akta」の活動を、コミュニティに向けて報告する会を毎年開催する。

8) パー・サーベイ (戦略研究と共に施行)

パー顧客を対象としたアンケート調査を実施し、現状の把握および予防啓発の効果指標とする。

9) Living Together Lounge 出演者への RDS 調査 (戦略研究と共に施行)

Living Together Lounge の出演者から、どのくらいの波及・浸透効果を持つかを検討する。

3. 倫理面への配慮

男性同性愛者／両性愛者は、社会からの偏見・差別が強く、啓発活動を進める場合はこれらを配慮する必要がある。このため、本研究では、当事者と連携して調査、啓発等の内容を検討し、対象者を含めゲイコミュニティへの倫理的配慮を保ちつつ研究を進める。コンドーム啓発プログラムをゲイコミュニティに浸透させるためには、バー、クラブ、ハッテン場等の施設の協力が必須で、研究の主旨等を説明し、施設経営者等との相互理解、信頼関係を構築している。

C. 研究結果

1. コミュニティセンター「akta」

コミュニティセンター「akta」は、MSMを対象としたコミュニティベースの予防啓発普及の拠点を目的に2003年8月設立された。運営はエイズ予防財団の「男性同性間のHIV／STI感染予防に関する啓発事業」を受託する形でRainbow Ringがおこなっている。ゲイコミュニティに根ざした予防啓発活動をするために、また無関心層を呼び込むために、アクセスのしやすさを考えてゲイ商業施設等の集中している新宿2丁目に設立し、入りやすくつろぎやすい雰囲気第一を第一義に考えている。また展示会やミーティング、講演会なども開催できるコミュニティスペースとして運営し、認知の向上と来場者の増加を図っている。事務局員が1～2名連日交代で勤務し、第2日曜日および年末年始を除いて、毎日16時から22時まで開場している。なお、2008年9月より毎週月曜日も休館日として、清掃や内部利用の日とした（統計上月曜日の来場者数が比較的少ないため）。

(表1)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
1日平均来場者数	27.2	30.8	30.2	28.3	36.1	27.5	29.6	32.4	29.9
昨年との差	-1.9	5.5	0.7	-5.8	-3.9	-2.8	-3.9	-3.9	-5.1
初来場者数	51	74	106	91	99	94	79	134	75

aktaは以下の活動をおこなっている。

- ・ 情報提供（予防啓発に関わる情報およびコミュニティ情報）
- ・ 啓発資材や啓発プログラムの開発
- ・ 資材配布の拠点（資材の作製・梱包・管理・配送・アウトリーチ等）
- ・ HIV/AIDSに関わる人たちの利用（ミーティングや研修など）
- ・ 学習の場（ワークショップや講演会など）
- ・ コミュニティスペース（ドロップインスペース、展示スペース、さまざまな打ち合わせやミーティング利用など）

1) 来場者の動向

今年度のaktaへの1日平均来場者数の推移は（表1）のとおりであった。初来場者数は平均すると日に約2～4人で、昨年度に比べて増加傾向にあった。

2) aktaの利用状況

aktaは様々なミーティングや講演会、展示会などに利用されている。今年度公開としておこなわれた展示会・講演会は、以下のとおりであった。

- ・ オペラグラフィカ「SNOW WHITE ～白雪姫～」(4/28～5/10)
- ・ IDAHD 報告会 (5/17)
- ・ 「カラセンツォ（+オマセン）」(5/19～6/1)
- ・ バーパーティ (6/1)
- ・ 「働く男」達 jiro イラスト展 (6/16～6/29)
- ・ 「Rainbow Arts 2008 Pre-Exhibition [RED]」(7/21～7/27)
- ・ 「Rainbow Ring あゆみ」展 (7/25～8/10)
- ・ ジャンジ♥のワークショップ「ハグハグ」(8/10)
- ・ 風太郎写真展「笑顔」(8/18～8/24)

- ・風太郎写真展イベント「み境なし其の巻」(8/23)
- ・MAAYA Exhibition “sunny” (8/25～8/31)
- ・「Formal Issues」展 (9/2～9/13)
- ・Robomi OS 展 ver.4 (9/16～9/28)
- ・「Pink weekend」のり助展 (9/30～10/11)
- ・「コミュニティアート」映像祭 (10/14～10/15)
- ・「YEP2008 交流プログラム写真展」(10/16～10/26)
- ・第91回 AIDS & Society 研究会議フォーラム「エイズキャンペーンとメディア」(10/25)
- ・講演会「エイズはじめて物語(第一話)」(10/26)
- ・「moriuo」展 (10/28～11/11)
- ・「ボルノグラフィー」展 (11/1～11/23)
- ・「Episode from OURDAYS」展 (11/25～12/7)
- ・「Mi vida」展 (12/9～12/21)
- ・新宿区エイズ・性感染症講演会「わかりやすいエイズ・性感染症の話～健やかな日々を続けるために～」(12/10)
- ・「ボクライフ」原画展 (1/20-2/1)
- ・講演会「エイズはじめて物語(第二話)」(2/7)

(表2)

使用内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ミーティング									
Rainbow Ring	11	10	12	9	15	14	12	12	3
Rainbow Ring 以外	12	7	12	5	8	11	13	18	10
研修会・勉強会									
Rainbow Ring	1	1	0	1	1	0	1	1	0
Rainbow Ring 以外	11	15	8	8	7	8	12	10	10
公開イベント・講演会									
Rainbow Ring	0	0	0	1	0	0	1	0	1
Rainbow Ring 以外	0	1	1	1	2	0	1	0	1
展示	1	1	1	1	2	3	3	2	1
取材・見学	3	3	14	3	3	1	6	2	3
相談	8	9	8	15	10	5	8	3	3

また定例的に、韓国語講座、中国語講座、AGP セミナー、AA（アルコール依存症からの回復）ミーティング、句会などに利用していただいた。

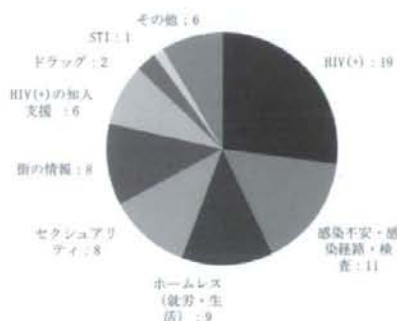
また、akta の利用状況は（表2）のとおりであった。Rainbow Ring 以外のミーティングが増加したが、ほとんどが戦略研究のミーティングであり、戦略研究の活動の拠点としても機能していた。

3) 相談

来場者から相談があった場合には原則的に、akta にある資材や相談機関を紹介している。感染不安などについては専門的なカウンセリングができないことを了解の上、傾聴するに留め、誤った知識については適正な情報を提供するように努めている。また、akta の特性上「オープンスペース」という環境での対応になることをご理解いただいている。紹介する資材については検査や病院、性感染症などの情報を充実させている。

今年度は、月に3～15件の相談があった。相談の内訳は（グラフ5）のとおりであった。これは一回の相談につき1つのテーマで分類しているため、内容が多岐にわたる場合はその主なテーマを示している。

(グラフ 5)



4) 資材の梱包・管理・配送・アウトリーチ

首都圏の保健所等の検査機関や HIV 診療拠点病院、行政、各商業施設、Rainbow Ring の活動に関わっていただいている個人や団体などに、「マンスリーakta」をはじめ、イベントのフライヤーや、作製した啓発資材を梱包して配送している。毎月約 140 通の資材の配送をおこなっている。また、アウトリーチするための資材を梱包・準備している。

また、戦略研究とも協力して、戦略研究で作製した資材の管理や仕分け、配送やアウトリーチもおこなっている。今年度はテニスやバレーボールなどの「スポーツ大会」で配布する資材の梱包、「レインボー祭り」での資材の準備とアウトリーチをおこなった。12 月～1 月のクラブキャンペーン時には 54 のクラブイベントを対象に、約 6,500 セットの資材の梱包と管理およびアウトリーチをおこなった。戦略研究で協力いただいている約 40 の保健所への啓発資材の配送も、akta で管理をしている。

5) マンスリーakta

情報紙「マンスリーakta」を毎月発行しており、デリヘルなどの各アウトリーチ活動、イベント折り込み、店舗での発送商品への折り込み、保健所や医療機関への発送などを通じて配布している。内容は akta のスケジュールや催し物の情報に加え、コミュニティ情報、医療や検査情報、Rainbow Ring の予防啓発活動の紹介などである。作製には Rainbow Ring

スタッフ以外のライターや写真家などにも継続的に関わっていただき、編集会議が定期的に行われている。記事の執筆や取材においては、コミュニティとの連携を念頭においている。表紙にはいろいろなタイプの顔写真を配し、様々なターゲット層に読まれるように配慮している。毎月 5,000 部発行している。

今年度からは、「Topics!」では、HIV に関連する話題に特化して、最新情報などを取り上げるようにした。

2. デリヘルプロジェクト

新宿 2 丁目の重要な構成要因であるバーおよびクラブの顧客や従業員を対象とし、コンドームをきっかけとして AIDS/STI やセーフターセックスを身近に意識してもらうことを目的に、コンドームアウトリーチをおこなっている。これはもともと自主的にコンドームを無料配布していた新宿 2 丁目の商業施設による団体「project com.」との協働事業であり、Rainbow Ring が人的提供およびコンドームの作製・提供をしている。

ボランティアスタッフ「デリヘルボーイ」(delivery health boys の略)により、毎週金曜日に新宿 2 丁目の商業施設を対象に、コンドームと啓発資材のアウトリーチをおこなっている。

今年度作製したコンドームパッケージは 16 種類であった。また、今年度は 12 月までで 30 回のアウトリーチおこなわれ、1 回あたり 500～2,206 個、平均 1570 個、のべ 47,086 個のコンドームを配布した。配布したボランティアは各回 3～11 人であった。配布店舗数は 1 回あたり 133～149 軒であった。

デリヘルボーイは、毎月数名ずつ新人が入ってきており、また同時に活動に参加しなくなる人もいるため、比較的出入りが激しい。アウトリーチをしている際に HIV/STI や予防について、または Rainbow Ring の活動の内容について質問をされることもある。それに

対しては、質問集を作るなど、情報を共有するような工夫をしたり、勉強会や交流会を開催して情報の伝達を図っている。毎回のデリヘル活動後にはコアスタッフとともに必ずミーティングを行い、活動中における問題点を交換し、コメントを加えている。

3. デリヘルインタビュー分析

昨年度末、デリヘル活動の対象である各商業施設に対して、アウトリーチ活動による効果の検討のためにインタビュー調査を実施した。本年度はその内容について分析をおこなった。アウトリーチをしている146軒中、インタビューにご協力いただいた店舗は85軒(58%)で、そのうちビデオでの撮影を承諾していただいたのは36軒(25%)であった。

■HIVについての認識とその変化

- ・HIVに対するタブーは以前に比べて低くなっている(抵抗感や違和感はない。話題に出る。お客さんで陽性者の方がいる)。
- ・一方で、お客さんや雰囲気配慮してあまり積極的にHIVの話題は出さないという店もある。
- ・正確で系統だった情報が届いていない店もある。
- ・感染が判明した後に実際に受けることのできる治療やサービス、「感染したらどうなるんだろう?」といった、さらに詳しい情報に対するニーズがある。

■デリヘルやaktaの活動に関する意見や要望

- ・ほとんどの店がデリヘル活動やコンドームのパッケージに対して好印象をもっている。
- ・aktaやレインボーリングの活動をわかりやすく説明するもの、伝えるものが必要だという意見が聞かれた。
- ・前述の「感染後の状況」についての情報を、わかりやすく伝えて欲しいとの要望もあった。

- ・HIV関連の情報に対して受容的な姿勢はあるが、能動的・積極的に得ようとする余力がない印象である。
- ・何かあったときにaktaを利用したことがある経験は一部で聞かれたが、まだ浸透していない様子である。

■コミュニティ内での温度差

- ・HIVへの関心が高い人や、陽性者の知人やお客さんがいるなどの理由でリアリティを強くもつ人がいる一方、意識の薄い人や関心を示さない人もいる。
 - ・知識、リアリティの両面から見て大きな温度差がある。
 - ・新宿2丁目に来るノンケ(異性愛者)の女性が意外とコンドームに関心を示している。
- #### ■新宿2丁目のゲイコミュニティの多様性
- ・新宿2丁目にはゲイバーだけでなくノンケの人が経営しているお店があったり、同じゲイでも年齢や嗜好が全く異なったり、いろいろな国の人が集まる店があったりと、多様性を改めて実感した。
 - ・それぞれの多様性を考慮した、多様な啓発資材や啓発方法が求められている。

■ゲイバーの役割

- ・バーの役割については「すぐには思いつかない」あるいは「なかなか難しい」としながらも、半数以上の店舗では、「HIV」や「性病」や「うつ」などの問題を抱えるお客さんから相談などを受けたことがある。
- ・お客さんの「話を聞いてあげる」ことが大きな役割の一つだと答えるマスターや従業員が多い。

4. アダルトデリヘル (Delivery Adult)

都内約85軒のハッテン場およびゲイポルノショップ(新宿2丁目を除く)に啓発資材(「マンスリーakta」と「HAVE A NICE SEX」、戦略研究で作製した資材など)をアウトリーチした。

新宿近辺のハッテン場(約35軒)について

は、デリヘルのアウトリーチと同時におこなった。また、上野・浅草～東京・新橋の都心のハッテン場・ゲイボルノショップ（約 25 軒）については、レンタカーでアウトリーチをおこなった。それ以外の遠方のハッテン場（約 25 軒）には郵送した。それぞれ、月に 1 回のペースで配布をおこなった。各店舗には啓発資材用のラックを設置していただいている。1 回あたりのレンタカーでの配布数は約 900 部であった。

5. 講演会「エイズはじめて物語り」

日本における HIV にまつわる状況についての理解を深めるため、過去から現在までの経験や動きを振り返ることで、今の問題点や今後の課題を探ることを目的とした、講演会をおこなった。

初回の講師として、HIV 陽性であることを公表しながら長年 HIV の様々な活動に携わってきた長谷川博史氏を招き、氏の体験と活動の両面から日本の HIV 感染症の現状や今後の展望について講演していただき、ディスカッションをおこなった。2008 年 10 月 26 日（日）akta にて開催。10 名の来場者があった。

以降の予定は以下の通りである。2009 年 2 月 7 日（土）「日本のエイズ報道」講師：宮田一雄氏。2009 年 2 月 20 日（金）「日本のゲイムーブメントとエイズアクティビズム」講師：伏見憲明氏。2009 年 3 月 21 日（土）「日本のエイズはここから始まった」講師：花井十伍氏。

6. Living Together 計画

陽性者との共生をテーマに、NPO 法人「ぶれいす東京」が 2003 年から始めたプロジェクトである。現在 Rainbow Ring も協働で進めている。

HIV に対する認識が低いことは、陽性者が身近に存在することにリアリティがないことに起因する。また予防とは、陽性者を排除す

ることではなく、誰もが一緒に生きているからこそ誰にでも必要なものである。陽性者やその周囲の人が綴った手記などを通して上記のことについて気づくことや、HIV の問題に対して向き合うことを促すプロジェクトである。

1) Living Together Lounge（音楽とリーディングのタベ）

クラブイベント会場（Arch）・DJ・ミュージシャン・朗読出演者とのコラボレーションで実現している（毎月第一日曜日開催）。陽性者やその周囲の人が綴った手記を、ゲイコミュニティの著名人をはじめ、HIV に関わる様々な立場・職種の人々（陽性者や支援者、医療従事者、行政担当者など）が朗読し、その手記を朗読した理由や感想についてコメントをいただく。その合間でライブミュージックと、DJ の選曲・アレンジした音楽を楽しむイベントである。ミュージシャンからも自分自身と HIV 等の関わりについてのコメントをいただいたり、朗読をしていただいたり、場の雰囲気にあった演出を心がけていただいている。毎回 50～120 人の参加があった。出演者が毎回変わることで、毎回初来場者を 10～50 人呼び込むという効果もある。

2) Living Together のど自慢

Living Together Lounge がプロや人気のあるミュージシャン・アーティストの出演を楽しむイベントであるのに対して、素人がカラオケを楽しみながら、手記の朗読とそれに対するコメントを述べていくイベントである。今年度は 6 月 29 日（日）と 9 月 23 日（火・祝）に新宿 2 丁目のバー「九州男」で開催した。毎回 12～14 人の方に出演をいただき、40～50 人の参加があった。3 月にもう 1 回開催予定である。

希望があれば誰でも参加できる参加型イベントであることと、以前より HIV 啓発活動に場所の提供等のご協力をいただいている「九州男」での開催という点からも、重要なプロ